

氏 名	伊吹 美貴子
学 位 の 種 類	博士（学術）
学位記の番号	甲第242号
学位授与年月日	2022（令和4）年3月20日
学位授与の要件	学位規則第5条第1項該当
学位論文題目	新自由主義におけるケアとサブシステムの政治——社会的保護と解放の接合にむけて
論文審査委員	主査 渋谷望 （現代社会論専攻 教授） 副査 西村一之 （現代社会論専攻 教授） 平田由紀江 （現代社会論専攻 准教授） 檜村愛子 （愛知大学文学部 教授） 小田原琳 （東京外国語大学大学院総合国際学研究院 准教授）

論 文 の 内 容 の 要 旨

概要

キャロル・ペイトマンは、女性がシティズンシップを要求するときに直面せざるをえないフェミニストのジレンマを、フランス革命時のフェミニスト、メアリ・ウルストンクラフトの議論にちなみ、「ウルストンクラフトのジレンマ」と呼ぶ。そのジレンマとは、性別役割分業による女性の抑圧状況を乗り越えるためにとる、二つの異なる戦略のジレンマである。一つは、ジェンダー中立的に女性にも男性労働者を標準とするシティズンシップを拡大することを要求する方法であり、もう一つが「女性の独自性」をシティズンシップの価値として認めるように要求する方法である。この「ジレンマ」は、フェミニズムにおいて男女の同一性を主張する「平等」派と、女性の独自の価値を主張する「差異」派の対立・ジレンマと重なる。

現在の新自由主義的なジェンダー概念は、女性の賃労働への参入など、「平等」派の方向性に進んでいる。しかし、新自由主義秩序は、「依存」と対立する「自立」を正常な状態とみなし、「自立」を体現するものとしての「男性」像は温存される。これにより「依存」者をケアすることは、例外的な事態とみなされる。それゆえ、ケアが軽視されたままそのケアを担うという矛盾は、いっそう女性に集中する。本稿は、このような事態を乗り越えるために、「平等か差異か」という二つの選択肢それ自体を相対化し、新しい視座を提示することを目的とする。

本稿では、これを相対化する視座としてサブシステム論とケア論をまず検討し、それらを日本における80年代のフェミニストの議論における「女並み」論と関連づけ、そこに「平等か差異か」のジレンマを乗り越える契機を見出す。さらに、フレイザーの示唆する

「社会的保護」と「解放」の接合にオルタナティブな戦略の可能性を示唆する。構成は以下の通りである。

第1章「マリア・ミースのサブシステム・パースペクティブ——サブシステムの両義性」では、マリア・ミースやヴェロニカ・ベンホルト＝トムゼンらのサブシステム論を通じて、サブシステムの両義性を指摘する。サブシステムとは、生命や生活の直接的な生産・再生産を意味する。ミースらは、資本主義が男性の賃労働者化と女性の「主婦化」を基礎として発展し、サブシステムが資本と賃労働に従属する無償労働となり、価値が引き下げられている構造を明らかにしたが、さらにサブシステム論を一步進め、第三世界の女性たちが「主婦化」を拒否し、資本から自律したサブシステムを取り戻す実践に「解放」の契機を見出し、それを「サブシステム・パースペクティブ」と呼んだ。このようにサブシステムは、資本への従属と自律のせめぎ合いの場となる両義性に関わっていることを明らかにした。

第2章「80年代フェミニズムにおける総撤退論を再考する——マリア・ミースのサブシステムの視座から」では、「差異」派として批判された加納実紀代の「総撤退論」が、ミースらの「サブシステム・パースペクティブ」と基本的視座を共有していることを確認し、総撤退論を「女並み」戦略として解釈した。女性の労働市場からの総撤退を呼びかける加納の主張は、あくまでも賃労働からの撤退であり、使用価値に基づくサブシステムの労働をむしろ評価するものであった。加納は、「家事・育児という再生産労働を解放されるべき桎梏とみるよりは、人間らしい生活に欠かせないもの」であるとし、「男女ともにそれを担う」ものとする発想を「女並み」と呼ぶ。さらに、総撤退論は、雇用機会均等法制定前夜に提起されており、「男並み」を基準とする新自由主義的な女性の主体化、「自立」観を問うのであり、「他者にむかってひらかれる自立」という使用価値に基づく新たな「自立」観を予示するものである。

第3章「「女並み」への想像力——アウトサイダーのジレンマを越えて」では、ジョアン・トロントとナンシー・フレイザーのケア論を取り上げ、そのケア論が「女並み」戦略として位置づけられることを示した。

ケア論は、キャロル・ギリガンによって「ケアの倫理」が示されたことに端を発する。ギリガンは「ケアの倫理」を「正義の倫理」と対比させ、「ケアの倫理」のポテンシャルを切り開いた。しかし、「ケアの倫理」は、私的な関係の中に限定されていたために、公的領域に属する「正義の倫理」に従属するものと見なされた。「ケアの倫理」は「女性の道徳性」として提示されたわけではなかったが、公的領域が男性に特有の領域として、そして私的領域は女性に特有の領域とみなされていたために、「ケアの倫理」は、女性の倫理と見なされる傾向にあった。これに対して、トロントは、「ケアの倫理」が私的領域にふさわしい道徳性で見なされている点を批判し、それを公的領域へと広げる必要性を主張した。トロントは、「平等」派も「差異」派も周辺から中心というベクトルを前提とした戦略であることを明らかにすることで、二つの選択肢を規定する構造を相対化する。トロントは、ケアが私的領域を超えて政治的水準で考えられることの重要を指摘し、このジレ

ンマを乗り越えられるとした。

また、フレイザーの「普遍的ケア提供者モデル」を検討し、それが「女並み」の戦略として位置づけられうることを示し、最後に、トロントとフレイザーの議論を突き合わせ、男性も含めた人間の脆弱性の普遍性を認めることによって、「女並み」という言葉の持つ限定性を解除する必要性を示唆した。

第4章「新自由主義の主体としての女性とその矛盾——人的資本の主体とフェミナ・ドメスティカ」では、新自由主義において呼びかけられる女性の主体性が、不安的な条件のもとで構築されていることを指摘した。まず、新自由主義の人間像を、フーコーとブラウンの議論に依拠して、人的資本の主体として検討した。人的資本としての自己構築は、「平等」派戦略といえる。次に、婚活言説を検討し、婚活言説が、注意深い自己投資を要請する、日常生活に入り込んだ「人的資本論」であることを明らかにした。さらに人的資本によって呼びかけられた主体が、ジェンダー的に非対称であること、そしてこの非対称性の根底には、ケアと人的資本の矛盾があることを指摘した。最後に、人的資本の主体は、彼らのケアを担う「不可視の基盤（インフラ）」であるフェミナ・ドメスティカに依存していることを指摘した。

第5章「ケアの危機とそのオルタナティブ」では、新自由主義における「ケアの危機」とそのオルタナティブを検討した。新自由主義は、誰もが賃労働に従事する「普遍的稼ぎ手モデル」を理念とするがゆえに、女性が賃労働と家事・育児の二重負担をせざるをなくなる。さらにその一部は市場化され、アウトソーシングされるが、ケア労働者の労働条件は悪化し、その結果、社会全体でケアを提供する能力は低下し、「ケアの危機」が生じる。

第1節では、日本の文脈で「ケアの危機」を確認し、「妻つき男性モデル」にその矛盾が集約されていることを明らかにした。第2節では、フレイザーの「蓄積レジーム」分析を用いて、資本の蓄積レジーム史において、どのように社会的再生産とジェンダーの関係が構築され、それらをめぐる規範的秩序が変容してきたのかを見た。第3節では、「ケアの危機」を乗り越えるために、フレイザーがポランニーを援用して導出した枠組み、「市場化」、「社会的保護」、「解放」のせめぎ合いとしての三重運動論を検討した。それによって、新自由主義が「市場化」と「解放」の接合形態であることを確認すると同時に、「社会的保護」と「解放」の接合にオルタナティブの可能性があることを提起した。また、この三重運動における「社会的保護」と「解放」が、フレイザーが従来から論じている「再配分の政治」と「承認の政治」に該当することを明らかにした。さらに、ケアとサブシステムの側にも、そのオルタナティブの側にも結びつくことを確認し、双方の側による「奪い合い」の政治に注目した。

終章「社会的保護と解放の接合——ケアとサブシステムの政治」では、上記の三重運動論を援用して、ケアおよびサブシステムの実践を「社会的保護」と「解放」の接合に定位させることで、新自由主義に対するオルタナティブとして位置づけ、そこに新たな「自立」観を指摘した。本章は五つの節によって構成される。

まず、第1節、第2節では、トロントが「新自由主義的ケア」の原型と位置づける、移民女性による高所得者層の家庭内での育児労働（ナニー）のトロントの分析を用いて、「新自由主義的ケア」が民主主義的な尊厳の感覚と両立しないことを明らかにした。さらに、「新自由主義的ケア」による女性「解放」を容認するフェミニズムの責任についてのトロントによる問いかけに注目し、それが第二波フェミニズムへのケア論からの重要な問題提起であることを確認した。さらに「新自由主義的ケア」が民主主義の基盤を掘り崩すものであることを確認した。

第3節では、ケアの倫理を野宿者の女性とその支援活動のなかに見出す丸山里美と岡野八代の議論を参照し、ケアを民主主義的な実践と結びつけるための条件を検討した。事例から浮かび上がったのは、「関係的な自律」の重要性である。それは、困難な状況を個人として「乗り越えよう」とする「自立／自律」ではなく、支援のネットワークを通じて「生の抑圧の条件を変え」ようとする自律のあり方である。また「抑圧の条件の変更」は、ケア責任のパターンについても選択肢を創出し、ケア責任の割当を再検討することにつながる。このようなケアと民主主義の接合の実践は、ケアを「解放」と「社会的保護」の側に取り返す条件である。

第4節では、三重運動論の枠組みから「サブシステムの両義性」を位置づけ直し、自律的なサブシステムの可能性をグローバルサウスの文脈で検討した。サブシステムはシャドウワークにも、自律的サブシステムにもなりうる。この両義性は、サブシステムそれ自体は「前政治的」であることを意味し、新自由主義の側にも、そのオルタナティブの側に結びつきうるということの意味する。したがって、「社会的保護」と「解放」の交差に自律的なサブシステムを位置づけることができる。具体的には、シルヴィア・フェデリーチの債務資本主義分析を通じて、サブシステムと親和的とみなされているマイクロファイナンスによって、サブシステムを営む女性たちが金融資本主義に取り込まれていることを指摘した。そしてオルタナティブな「解放」とは、コモンの「社会的保護」を取り戻し、それを基盤としたサブシステムと接合された「解放」であることを示した。

第5節では結論として、加納のいう「他者にむかってひらかれる自立」が「関係的な自律」であること、そして「社会的保護」と「解放」の接合する場において、「関係的な自律」が前提とする脆弱性を肯定することによってエージェンシーが増幅する可能性があることを示した。

論文審査結果の要旨

I 論文の概要

本論文は、ケアおよびサブシステムを新自由主義へのオルタナティブの側に取り戻すための理論的試みである。本論文では、この試みは、フェミニズムにおける「平等か差異か」のジレンマを乗り越えることとして一貫して提示される。というのも、理論レベルでの「平等か差異か」のジレンマは、「新自由主義か本質主義か」のジレンマとして一般的

に解釈され、その枠組のなかで「本質主義」が退けられ、「新自由主義」が選択・選好されてきたからである。このジレンマの枠組みを相対化する視座として、本論文は、サブシステム論とケア論に着目し、それらを日本における80年代のフェミニストの議論における「女並み」論と関連づけ、そこにこのジレンマを乗り越える契機を見出す。さらに、フレイザーの示唆する「社会的保護」と「解放」の接合にオルタナティブな戦略の可能性を示唆するものである。

本論文の各章は以下のとおりである。

第1章では、マリア・ミースのサブシステム・パースペクティブを通じて、サブシステムの可能性を析出すると同時に、サブシステムの両義性を明らかにする。すなわち、ミースは当初、おもに女性が従事するサブシステム、つまり商品の生産と消費を媒介せずになされる自給的農業や家事・ケアワークを、資本主義を支えつつも可視化されえないシャドウ・ワークとして捉え、その問題としての側面を強調してきたが、80年代以降は、サブシステムの自律的で解放的な契機を見出し、その視座をサブシステム・パースペクティブと名づけた。サブシステムは不払い労働の側面を持つことから、リベラル・フェミニズムにおいてそのポテンシャルが理解されない点が指摘されると同時に、サブシステムのあり方が、従属的になるか自律的になるかのせめぎあいの側面が本論文の中心的テーマとして示される。

第2章では、サブシステム・パースペクティブを通じて、80年代に日本のフェミニズムにおいて提起された加納実紀代の「総撤退論」の意義が再考される。女性の労働市場への包摂を目指す男女雇用機会均等法の成立を背景に、女性の労働市場からの総撤退を呼びかける加納の主張は、当時、女性の家庭回帰を志向する「差異」派的な主張として読まれ、リベラル・フェミニズムから批判されたが、加納が「男並み」の「自立」とは異なる新たな「自立観」を核にした「女並み」社会を構想していたことが明らかにされる。

第3章では、ジョアン・トロントとナンシー・フレイザーのケア論を取り上げ、そのケア論がこの「女並み」の戦略であることが示される。トロントは、「平等」派も「差異」派も、「周辺」に位置づけられた女性たちが「中心」に参入することを志向する戦略であることを明らかにすることで、二つの選択肢を相対化し、いわば「中心」を解体し、「周辺」をデフォルトとするケア論、つまり、ケアが私的領域を超えて政治的な水準に位置づけるケア論を提唱する。他方、ナンシー・フレイザーは、男性もケアを担う「普遍的ケア提供者モデル」を提示した。本論文では、これらの議論を「女並み」戦略として位置づけ、サブシステム・パースペクティブとの間に理論的な架橋が試みられる。

第4章では、ミシェル・フーコーとウェンディ・ブラウンの新自由主義論、およびポストフェミニズム論を参照し、人的資本の主体としていかに女性が新自由主義に取り込まれ、構築されているかが検討される。具合的には「婚活」言説における自己投資的側面が、人的資本の主体への呼びかけとして分析される。この人的資本としての自己構築は、「平等」派戦略（「男並み」戦略）といえるが、このような新自由主義の主体としての女性は、自立した主体に見えるが、ケアを不可視化されつつもそれを必要としている点で、つねに不安定であることが明らかにされる。

第5章では、まず、新自由主義においては社会のレベルでケアは不可視化されるために、「ケアの危機」が顕在化されることが検討され、そこで生じた矛盾は、女性が引き受ける

ことになる点が指摘される。さらに、「ケアの危機」に対するオルタナティブを考えるために、フレイザーの「三重運動」論を検討する。「三重運動」論は、フレイザーがカール・ポランニーの「二重運動」論を援用して導出した枠組みであり、ポランニーの「市場化」と「社会的保護」の対立に、さらに「解放」を加えた、三項のせめぎ合いとして資本主義の歴史を動態的に捉える枠組みである。この枠組みにおいて、現在の「ケアの危機」は、「市場化」と「解放」（フェミニズム）の接合形態としての新自由主義に起因があると分析され、そのオルタナティブとして「社会的保護」と「解放」（フェミニズム）の接合の方向性が示される。

終章では、上記の三重運動論を援用して、サブシステンスとケアを「社会的保護」と「解放」の接合に定位させる可能性を示すことで、ケアとサブシステンスを、新自由主義とそのオルタナティブとのあいだの「奪い合い」の政治のなかに位置づけると同時に、オルタナティブな新たな「自立」観を「関係的自律」とし、その具体的なあり方を検討する。

II 審査結果の要旨

本論文は新自由主義的統治を「ケアの危機」という視点から捉え、ナンシー・フレイザーの三重運動論における「社会的保護」と「解放」の契機の接合という視点がその乗り越えを可能にすることを理論的に論じた意欲的な論文であり、以下の点でとくに優れていると評価された。

第一の点は、論文全体の枠組みに関するものである。本論文は近代フェミニズムを特徴づけてきた「平等か差異か」という議論の限界を、サブシステンスやケアの両義性という視点から丁寧に解きほぐすことから出発している。サブシステンスやケアの概念は、歴史的に規定されてきた女性性の／からの解放のために提起されながら、つねにフェミニズム内部で論争を巻き起こしてきた。この論争を乗り越えるために、私的領域にケアを配置しつつることによって、人々の再生産やケアを無償化・不可視化し、取るに足りないものとして公的議論から排除してきた近代統治を批判するトロント、フレイザー、ブラウンらを参照し、ケアや再生産を女性の問題に閉じ込めないかたちで議論を開いていったことは適切であり、説得力を高めている。また本論文で参照される「女並み」論も、一見「男並み」の対抗概念のようにもみえるが、「男並み」という言葉の意味をずらし、社会のあり方を問う実践の言葉として把握する読解も独自性があり、高く評価できる。

第二の点は、本論文が新自由主義的イデオロギーを分析するだけでなく、そのオルタナティブを理論的に提示することを試みている点に関するものである。本論は、フレイザーの三重運動論の枠組みを使い、「社会的保護」と「解放」の接合を試み、それによって、新自由主義を相対化すると同時に、パターンリスティックな「社会的保護」像と、個人主義的な「解放」像のどちらにも与しない、両者の「接合」のなかに、オルタナティブな「関係的自律」のイメージを導出し、その具体像を描こうとする。とくに、「逡巡」するエージェンシーを「ケア倫理」のなかに見出し、積極的に評価し、その「逡巡」のなかに、政治的で集合的なエージェンシーを構築する可能性を見出そうとする理論的独創性を評価できる。

第三に、本論文の独創的な点として、日本のフェミニズムの文脈において批判されてきた加納実紀代の「総撤退論」の再評価の試みが挙げられる。1985年という日本の女性史・

フェミニズム史の転換点に書かれた論文が、近代の産業社会の構造そのものを問い、そのオルタナティブな「自立」像を提起していることを再発見し、加納の問いかけをミースのサブシステム・パースペクティブおよび、フレイザーの三重運動論の枠組みを通じて、グローバルな資本主義史における新自由主義への問いとして位置づけ直した点は、女性史やフェミニズム史においても重要な論点を提起するものとして評価できよう。

本論文は以上のようなオリジナリティをもつものとして高い評価が与えられたが、今後の研究の課題として以下の点も指摘された。

全体の議論の枠組みが適切に設定されているが、各論の記述にムラがあり、説明が十分とは言えない箇所が見られた。とくに新自由主義的ケアの事例としての日本における保育の準市場化とそのオルタナティブについて、そしてグローバルサウスにおける従属的なサブシステムと自律的サブシステムのせめぎあいの複雑さについて、具体的事例を通じての考察の不十分さが指摘された。ただし、これらの指摘は、今後の研究において課題が乗り越えられていくことを期待するものであり、本論文の学術的、理論的な独自性についての上記の評価を損なうものではない。

以上を踏まえ、審査委員会は全員一致で、本論文が博士（学術）を授与するのに相応しいものであるとの結論に至った。